# 狐女房考

## ——日本霊異記上巻第二縁をめぐって——

永田典子

### 序

凡そ狐という動物は、我々人間にとって良きにつけ悪しきにつけ親しみのある存在であるためか、これを扱った文献は枚挙に遑がない程であるが、狐が人間の妻になったことを題材とするものに、『日本霊異記』上巻の「狐を妻として子を生ま令むる縁第二」という説話がある。これと同趣のものには、御伽草子の『木幡狐』を初めとして、『兎園小説』(滝沢解等編、文政八)、『信濃奇談』(堀内元鎧編、文政一二)、『百家琦行伝』(八島五岳編、天保六)、『利根川図志』(赤松宗旦著、安政二)等近世の文献が伝わっており、林道春の『本朝神社考』下巻「玉藻ノ前」には、摂津の垂井氏が狐を妻とした話と一緒に、『霊異記』の話が「見水鏡曰」として引用されている。また「恋しくばたづねきてみよ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉」の歌で有名な「信太妻」は、陰陽師安倍晴明が狐を母として生まれたことを語っており、文献では古浄瑠璃正本角太夫本の「しのだづまつりぎつね付あべノ清明出生」(延宝二)等がある。

狐と人間の結婚がこうして文献に残されているということは、それだけ人々がこの奇事に対してただならぬ関心を抱いていたためであろうが、何れの内容もその結婚に伴う子供の誕生・狐の正体発見・失踪という要素を有しており、『霊異記』上巻第二縁の基本的形式を踏襲しているかのように見られる。しかしながら、文献上最古の記録だからといって、後世の狐女房譚がすべて『霊異記』の話から派生したとは言い難い。本縁の基本的形式は他の異類女房譚にも認められるものであるし、『霊異記』の時代以前にも狐女房譚が存在していた可能性は充分あるので

ある。そこで本稿では、上巻第二縁の依拠した説話について考察し、本縁がそれをもとにしてどのように形成されたかを検討してみたいと思う。

## 一

先ず、上巻第二縁の全文を見てみよう。

昔欽明天皇 是れ磯城嶋の金刺の宮に国食シシ天皇、天国押開広庭の命ぞ。 の御世に三野の国大野の郡の人、妻とす応き好き嬢を覓めて路を乗りて行く。時に曠野の中に姝しき女遇へり。其の女壮に媚ビ馴キ、壮睇ツ。言はく「何に行く稚嬢ぞ」といふ。嬢答ふらく「能き縁を覓め将として行く女なり」といふ。壮も亦語りて言はく「我が妻と成らむや」といふ。女「聴さむ」と答へ言ひて、即ち家に将て交通ぎ相住む。此頃、懐任みて一の男子を生む。時に其の家の犬十二月十五日に子を生む。彼の犬の子、毎に家室に向かひて、期兒ひ眶み皆ミ嘷吠ユ。家室脅エ惶りて、家長に告げて言はく「此の犬を打ち殺せ」といふ。然れ雖患へ告げて猶殺さ不。二月三月の頃に、設けし年米を舂く時、其の家室、稲舂女等に間食を充て将として碓屋に入る。即ち彼の犬の子、家室を咋は将として追ひて吠ゆ。即ち驚き〈渙〉ヂ恐り、野干と成りて蘿の上に登りて居り。家長見て言はく「汝と我との中に子を相生めるが故に、吾は汝を忘れ不。毎に来りて相寐よ」といふ。故、夫の語に随ひて来りて寐キ。故、名づけて岐都禰とす。時に彼の妻紅の襴染の裳 今の桃花の裳ぞ。 を著て窈窕ビ、裳襴を引きて逝く。夫、去にし容を視、恋ひて歌に曰ふ、

恋は皆我が上に落ちぬたまかぎるはろかに見えて去にし子ゆゑに

故、其の相生ま令めし子の名を岐都禰と号く。亦其の子の姓を狐の直と負ほす。其の人強き力多有り、走ること疾くして鳥の飛ぶが如し。三野の国の狐の直等が根本是れなり。

この話の舞台となっている地名は、主要人物である狐女房の夫を「三野の国大野の郡の人」と紹介することによって示されているが、この美濃国大野郡は既に奈良時代に存在しており、現在の岐阜県揖斐郡の東部に位置する大野町のことであるから、決して架空の地名ではない。するとこの話は実際にその地で伝承されていたもので、在地性豊かな説話と言えるのであり、『霊異記』上巻第二縁が狐女房譚の最古の記録といっても、それは文献上のことであって、『霊異記』編纂以前に少なくとも美濃

地方には狐女房の話が語られていたのである。

しかしながら、注意すべきは本縁が美濃の伝承をそのまま記録したものであるかどうかということである。本縁は最後に「三野の国の狐の直等が根本是れなり。」として始祖伝承の形を採っている。「狐の直」については後で触れるが、この最後の形式的な表現があることによって、狐女房と夫の別離の悲哀の余韻は半減してしまっており、守屋俊彦氏の言われる本縁の「恋愛文学らしい装い」[1]からすると不必要な部分と言える。だがそれにも関わらず「狐の直」の由来説明が記されているということは、美濃の伝承が「狐の直」の始祖の誕生に主眼を置いたものであったことを示し、『霊異記』の編者である景戒はその依拠説話の最後の部分を削除することなく本文に記したと言えるのであるが、本書のような説話集の場合、編者の文学意識がそれぞれの説話に反映され、改変が施されていることは当然考慮すべきであり、本縁にも景戒の筆が加えられていることは充分考えられる。では一体それはどういう部分に認められるのであろうか、そして、美濃で伝承されていた説話はどういうものであり、狐という異類と人間との結婚を語る説話の形成された背景には何があったのであろうか。この問題の考察に際して、本縁の特徴をつかむために昔話の狐女房との比較をしてみたい。

## 二

昔話といってもそれは現在に伝わっているものであり、『霊異記』の時代と千余年もの隔たりのあることから、本縁の特徴をそれとの比較によって把握するにしても、それが『霊異記』の依拠した伝承自体のものなのか、それとも本書の編纂時の改変によるものなのかを明確に指摘することは難しく、昔話をもって古代の伝承を探ろうとするのはあまり意義のないことかも知れない。しかし、昔話の狐女房譚は近世以後浄瑠璃等の影響を受けたりして、伝承されてきた各時代の相を内蔵し、伝承者の心情や思想を重層的に有してはいるが、話の構造を重視して見ると、結婚・子供の誕生・正体発見・失踪の要素が『霊異記』本縁と共通している。このことは、古代の説話の基本的要素が現在も尚継承され、語り継がれていることを示しており、そうした要素に古い伝承の姿を留めている可能性は濃厚であることから、『霊異記』と昔話の比較は必ずしも無意味とは言えない。

『日本昔話集成』[2]では狐女房譚を聴耳型・一人女房型・二人女房型の三種類に分類されているが、その話型は五つの基本的要素からなっており、これと『霊異記』本縁の構成要素は次の

のようになっている。

| 『霊異記』上巻第二縁 | 『日本昔話集成』狐女房 |
| --- | --- |
| ・美濃国大野郡の人が妻を求めて旅に出る。曠野で出会った女が男に媚びる。 | ・ある男が狐を助ける。 |
| ・女を家に連れ帰って妻にし、子供が生まれる。 | ・女が訪ねて来て妻になり、子供が生まれる。 |
| ・犬が噛み付こうと吠えたため、女は狐の姿に変じる。 | ・女は子供に狐の姿または尻尾を発見される。 |
| ・女は男の許に通って来るが、何処とも知れず去る。夫は妻を偲び歌を詠む。 | ・女は恋しくば訪ねて来て見よ云々の歌を残して去る。 |
| ・子供は美濃国の狐の直の始祖となる。 | ・a.その男の家の稲がよく稔る。<br>b.子供は後に鳥の言葉のわかる宝物を得る。 |

昔話の最後の要素は家を対象とした場合と子供を対象にした場合とに区別されているが、両方とも致富型として一括され得るもので、狐女房は別離後も夫や子供の生活を保証するようになっている。『霊異記』の説話ではこの要素に相当する部分が始祖の由来説明になっているけれども、子供が強力で走ることが鳥のように速いというのは、母親の資質・身体的特徴を受け継いでいるものであり、「狐の直」というように、系譜関係も母方を継承しているわけであるから、昔話の狐女房が子供に呪宝を与えるのと同じ範疇に属すると考えられる。この始祖由来説明は美濃での伝承を考察する上で重要な要素となっているが、これについては後で触れることにして、先ず昔話と『霊異記』の話との大きな相違点である結婚までの経緯と狐の正体の発見者について見てゆくことにする。

### (1)結婚の経緯

結婚の経緯は、『霊異記』の方では男女が互いに良き配偶者を求めていたとして、男が女を家に連れ帰って結婚しているのに対し、昔話では女が危難を救ってくれた男の許に恩返しにやって来て一緒に住むことになっている。こうした動物報恩のモティーフは異類女房譚の他にも動物援助譚に属する昔話群に語

られており、人間と動物との現実社会での交わりの親しさの反映と観じられるが、報恩の観念は異類女房譚には本来的に保有されていたものではなく、恐らくは現実の社会に順応して伝承されてゆく過程において付与されたと推想される。つまり、報恩という倫理的観念は、社会の中で生きてゆく上での現実的道徳であるために、現実社会に応じて生きる昔話の主要なモティーフの一つになり得たと考えられるのである。

それでは『霊異記』での結婚の経緯についてはどうであろうか。男が理想の女性を求め探しに行くのは、八千矛神が高志国に賢く美しい女性（沼河比売）がいるとの噂を聞き、わざわざそこまで訪ねて行ったという話や、神武天皇が大和の香具山に近い高佐士野の高原に遊ぶ伊須気余理比売に求婚した話等のように、神話の中にもしばしば語られているもので、男の妻問いの旅はそうした求婚説話の系統を引いたものであろうが、[3] 注意したいのは、女性の方もまた理想の男性を求めている点である。一般に異類婚姻譚において、図らずも人間界に来て人間と契を結んだ異類達は、何れも聖なる異郷よりの神に代わる来訪者としての性格を保有しており、或いはその聖なる胤を人界に留めることによって、人間に繁栄をもたらす者とされているが、こうした観念が『霊異記』の話にも反映されていると考えると、異類の女を男にめぐり会わせたのは人間側の要望であり、それによって女が良き男を探していた、即ち人間界に神聖な子供をもたらすために異郷から人間の世界にやって来て、結婚相手を探しているという内容になったと推測される。蛇女房譚等の結婚要素には報恩型の他に理由のない押掛女房型というのがあり、女が求婚の主体者になっているものがあるが、これも聖なる胤を人界に留めて欲しいと願う人々の希望が異類女房に積極的な行動をとらせていると解釈されるのである。

ところで、報恩の観念は民衆に因果応報の理を説く教義として重要なものであるが、『霊異記』がその正式名である「日本国現報善悪霊異記」の示す如く日本国の善悪の現報の霊異を記した書であるのにも関わらず、上巻第二縁に報恩の要素が欠けているのは問題である。但し、景戒はこの観念を決して軽視しているのではなく、本書には上巻第七縁や中巻第五縁・第八縁・第一二縁・第一六縁等のように、報恩を主題としてその大切さを説いている説話がいくつかあるのであるから、反対に折あらば報恩を利用して因果の理を示そうとしていたと考えられる。では何故本縁にはそれが表れていないかというと、先述のように、この話は景戒の個人的創作によるものではなく、美濃地方で伝承されていた説話を下敷として形成されたものであるため

に、その伝承で語られていた形式を踏襲したためではないかと推想される。或いは、中国の『任氏伝』(唐、沈既済撰)[4]に語られている男と人間に化けた狐とが路上で偶然に出会ったという内容の話の影響が及ぼされているのかも知れないが、とにかく美濃の伝承では発端部に報恩の要素はなかったと思われる。更に当時他の異類女房譚にこの要素が含まれていたならば、景戒は直ぐ様これを本縁に利用したであろうが、それがなされていないというのは、現在我々の知り得る報恩による結婚要素は伝承過程において付加されたもので、時代を溯れば、報恩を説かない伝承が存在していたことを示し、男女の結び付きを倫理的観念で説明しないところに、何かしら神話的発想が窺われるのである。

尚、『霊異記』本縁において男と狐女房の出会った場所を「曠野」と明記しているのは何か意味のあることのように思われる。男が旅の途上で狐女房に会ったことを語るならば、わざわざその邂逅場面をそこに設定する必要もないので、「曠野」は美濃の氏族伝承を『霊異記』に収録する際に付加されたのではなく、本縁の依拠伝承に既にあったと思われるが、それでも美濃の伝承に「曠野」が出てくるのは、伝承者にとってそこが特別視されていた場所であったからではないかと推想される。

「曠野」について先ず考えられるのは、一族の始祖の系譜を狐に求めている如く、狐女房は単なる山野に棲息する動物ではなく、異郷よりの来訪者としての性格を有していることから、そこは聖性を備えた異類が人間の世界に出現するために通過する場所、即ち異郷と人間界との境をなす空間であったということである。その場合、「曠野」が平坦地であることより、狐女房の異郷は地上において水平的にとらえられるが、「竜宮童子」「浦島太郎」「地蔵浄土」等の昔話からもわかるように、異郷は概して海底若しくは地下にあると観じられており、異類女房譚の原型と見做される豊玉姫説話において姫が海底の綿津見神の女であり、また天人女房譚の主人公が天から地上にやって来る神女であるのは、垂直的な異郷のとらえ方を示している。しかし、豊玉姫説話の海神の宮訪問について、『日本書紀』では塩土老翁が無目籠を作って、彦火火出見尊をその中に入れて海に沈め、海神の宮に行かせたとするのに対して、『古事記』では、火遠理命を无間勝間の小船に乗せた塩椎神が命に「我其の船を押し流さば、差暫し往でませ。味し御路有らむ。乃ち其の道に乗りて往でまさば、魚鱗の如造れる宮室、其れ綿津見神の宮ぞ。……」と教えており、そこには海と陸との水平表象における異郷の観想が横たわっていると見られる。この海と陸との水平表

象は常世信仰や豊玉姫の正体が八尋の大鰐であることに関係していると思われるが、本緑の場合、舞台となっている美濃国大野郡が平野部に位置し、農業を生活基盤とする土地柄であることや、異類が陸の動物であることから、美濃の伝承における異郷と人界の交錯した空間であったと考えられるのである。つまり、狐女房の出現した場所はある人々にとっては日常的な生活空間とは異質なものであったと解されるのであるが、それが「曠野」という広がりのある空間であることにはどんな意味があるのであろうか。そう所に狐がよく出没するという現実生活の経験があったろうことは勿論考慮すべきであるが、連続する空間が均質でないとする観念の背景には宗教的なものが関わっているように推想される。

男の妻問いの旅は非日常的世界への脱出であり、彼にとっては日常性を超えた異常な体験であること、しかもそれが婚姻に関係していることから、その旅は通過儀礼を背景としたものであり、「曠野」は男女が契を結ぶ儀礼の場ではなかったかと思われるが、狐女房と男との出会いは「狐の直」一族にとってみれば、言わば彼等の歴史の始まりであり、その出会いによって「狐の直」の歴史が築かれてゆくのである。『記紀』によれば、原初の宇宙は混沌とした状態にあったとされている。「曠野」という言葉は何か広漠とした虚無的な空間を想像させるが、それは歴史が創造される以前の状態を表徴しているのではないだろうか。そして、狐女房という聖性を備えたものがそこに示現することによって浄化され、生命と繁殖の源である婚姻の約束はそこにある方向付けを与え、秩序ある状態に変容させたと考えられるのである。

要するに、「曠野」という空間は「狐の直」一族の人間にとって決して日常的空間の延長線上に存在しているのではなく、彼等の歴史の起点として、また始祖の母となるべき狐女房の本来の世界と人間世界との交錯する空間として特殊視されていたのであり、本緑の依拠した始祖伝承における「曠野」のもつ意味は、空間の非均質性と関わっていると推想されるのである。

## (2)狐の正体発見者

次に狐の正体発見者について見てゆきたい。昔話の狐女房では女が昼寝や掃除をしている時に尻尾を表し、それを子供に発見されるという形式が多く、折口信夫氏はこの子供の無心でしたことが親達を破局に導く点を重視され、

太古の団体生活の秘密は、子供に対しては、とりわけ厳重

に守らねばならなかつた。成年式を経ない者に、団体生活の第一義を知らせると言ふ事は、漏洩の虞れがあり、又屢さうした苦い経験を積まされてもゐたからである。今一つは、無心な子供に、神意の託宣せられると言ふ信仰である。

此二つの結びつきが、此類の伝説の基礎にはあつたらしい。[5]

と論じられているが、関敬吾氏も指摘されているように、[6]子供が狐の正体を発見するのは文献では近世のものに多いので、果たしてそれ以前の伝承において子供が発見者になっていたかは疑問である。既述の如く、昔話の狐女房には信太の葛の葉伝説及びそれをもとに作られた説経節や古浄瑠璃に語られて流行した「信太妻」の影響が著しく、子供に発見者の役割を課すのも、人間共通の悲哀である子別れという語り物の重要なモティーフが人々の共感を誘い、昔話の伝承過程において受容された結果によると考えられる。

ところで、他の異類女房譚では夫婦の破綻は夫のタブー侵犯が原因となっており、蛇女房の話では産屋または授乳するところを覗いてはならない、魚女房では沐浴を見てはならない、鶴女房では機を織っているところを覗いてはならない等のタブーが女から夫に言い渡されているが、夫が好奇心を起こして覗くと、女は自分の本来の姿に戻っていて、覗かれたと知って夫の許から去るという形になっている。こうしたタブーとその違犯は非常に古いモティーフで、『記紀』の豊玉姫説話にも語られており、異類女房の正体発見者を夫とするのは古代に溯ることができる。従って、狐女房も元来は夫がタブーを犯して狐の正体を発見する話であったことは充分考えられ、例は少ないが、岩手県岩手郡、長野県南安曇郡、愛知県宝飯郡、長崎県壱岐郡に伝承されている昔話では夫を発見者としている。[7]ところが、『霊異記』の話では子供や夫が登場しているのにも関わらず、犬がその役割を果たしている。

異類女房譚において、夫によるタブー侵犯のモティーフが本来共通したものであったとすれば、犬の登場は改変によるものと解されるが、本縁のように、人間の女に化けた狐が人間と結婚し、犬にその正体を見破られたという話は、既に紹介した『任氏伝』にも見られる要素で、中野猛氏は平安末期に大江匡房が著した『狐媚記』にも任氏の名が見えることから[8]『任氏伝』が早く日本に伝えられて完全な日本化が行われ、それが『霊異記』上巻第二縁になっているとされており、[9]また寺川真知夫氏は本縁に影響を及ぼした中国文献を『幽明録』(宋、劉義慶著)第一八話の「狐の妻」に求められている。[10]だがこれらの話と本縁を比較してみると、狐が人間の妻になっていること、犬が狐の正

体を発く点で共通してはいるが、『任氏伝』において鄭六という男が任氏の正体を知ったのは餅屋の主人の言葉によっていること、任氏は正体を知られても鄭六から離れず、二人は愛し続けていること、任氏に思いを寄せる崟の登場による三角関係、鄭六と任氏の間に子供がいなかったこと、『幽明録』の話では子供が二人いること、犬の数が数十匹であること、犬は妻ばかりでなく子供も噛み殺していること等の相違点が指摘される。[11] 従って、これらの話が本縁の形成に影響を与えているとしても、それは部分的に認められることで、犬を狐の正体発見者とするのは、『北夢瑣言』（宋、孫光憲撰）の滄渚民の話[12]や『宣室志』（唐、張読撰）の韋氏子の話[13]、『広異記』（唐、戴孚撰）の李参軍の話[14]等にも見られ、『集異記』（唐、薛用弱撰）の薛燮の話[15]に「妖狐最憚猟犬」とある如く、中国において犬と狐が仇敵関係にあることは一般的に知られていたようである。日本の文献中、犬と狐の関係を『霊異記』以前のものに見ることができない以上、本縁の犬による狐の正体発見の要素は、中国の文献の影響によるところが大きいと推想されるが、そういう場合、その文献を限定せずとも、中国の一般的観念の流入としてとらえるべきではないだろうか。

尚、犬を狐に挑ませるという趣向が何時狐女房譚に採り入れられたかについては、中国観念が地方の伝承にまで直接影響を与えた可能性は希薄であり、当時中国の文献に接することのできた人間として中央の知識階級層の者が想定され、その中には当然僧侶も含まれていたと考えられるので、本縁における犬の登場は美濃の伝承においてなされたのではなく、『霊異記』編纂時の改変によるものであろう。

ところで、犬の登場に関して今一つ注意すべきは、狐の正体を見破ったのがその家に以前からいた犬ではなく、女が子供を産んだ後に生まれた子犬の方であったということである。[16] これは本縁の仏教的意義の有無を問う場合に問題にされる箇所で、以前からいた母犬でなく、後に生まれた子犬だけが女に挑んだのは、子犬と狐の間にただならぬ関係、即ち前世の宿縁があったためという見方もされているが[17]、子犬と狐の関係をそうした運命的対立とするには、本文はあまりにも説明不足と言わざるを得ない。『霊異記』下巻に「生物の命を殺して怨を結び、狐、狗と作りて互に相報ずる縁第二」という、狐と犬を扱った説話があり、輪廻による因果応報を両者の対立で表しているが、これは仏教的意義の有無を論議する余地を全くはさまない説話で、狐と犬の前世の宿縁が明確に記されている。これに比べて本縁では両者の前世については一言も触れておらず、たとえ景戒が

仏教的意図をもって犬の子を登場させたとしても、それは言外に匂わせているにすぎないため、説話の享受者側からしてみたら、それを読み取るにはその人の教養や読解力の程度に関わってくるが、『霊異記』の編纂は第一に人々に読んでもらうことを前提としてなされたのであるから、景戒は当然読み手というものを意識していたはずで、彼の意図するもの、つまり人々に理解してもらいたい彼の主張はそれなりにはっきりと打ち出されているべきではないかと思われる。従って、犬の子の登場に仏教的意義を説こうとするのはいささか無理と言えよう。では何故ここでわざわざ子犬を登場させて、母犬に発見者の役割を課さないかというと、長野一雄氏も論じられているように、[18] 母犬では話の展開上まずい事態になり兼ねないからであろう。即ち、以前からいた母犬が発見者になってしまうと、女は男の家に連れて来られた時点で狐の正体を見破られて、子供を産まないうちに男の許から去らねばならなくなってしまうからであり、犬の子の誕生を女の出産後としているのもこれと同様の理由によると考えられるのである。

## 三

以上、『霊異記』上巻第二縁と昔話の狐女房譚との大きな相違点として、結婚の経緯と狐の正体発見者について見てきたが、次に「吱都禰」語源説明と「狐の直」由来説明を見てみたい。

異類女房譚における始祖の誕生は、八尋の大鰐と火遠理命の間に生まれた男児（鵜葺草葺不合命）が叔母と結婚して四児が生まれ、その末子が第一代の帝で建国の祖とされる神武天皇であったという豊玉姫説話の系譜を引くものであり、別れて後の恋しさに忍びず、姫から歌を贈り、火遠理命が答歌するという愛情の深さや歌の利用は本縁と共通しているが、松前健氏の論考[19]にも述べられているように、異郷の妻は最初からタブーの侵犯がなくても、子供を産むという仕事を終えさえすれば、何時でもその本つ国に帰らなければならない運命の存在なのであり、この点に関して言えば、本縁の狐女房が正体を知られても、子供が絆となって破局を免れ、男の許にしばしば通っていたとするのは不可解である。真の姿を見られた狐女房にとって、男の優しい言葉は嬉しい反面苦悩を与えるものとなり、そこに狐とはいえ複雑な心の葛藤が想像されるが、ここでは夫婦関係の破

局が猶予されているのは、そうしなければならなかった必然性があったからで、それは二人の間に生まれた子供に「狐の直」の始祖たるべき「岐都彌」の名を付ける必要に応じることであったと解される。従って、「岐都彌」の語源説明はこれに続く「狐の直」の由来に関連付けるために用意されたもので、本縁において「狐の直」の由来を説くことが如何に重要なテーマであるかを物語る要素とも言え、当然これは本縁の依拠伝承において語られていたと考えられる。

キツネの語源については、キは黄色を表し、ツは助辞であり、ネは猫の略であるとする『倭訓栞』、キツはその鳴声からで、ネはそれに添えた語或いは稲荷神の使いと信じられていたことからの尊称のネとする『大言海』等諸説あるが、本縁の場合、狐に変じた妻の姿を見た夫の「汝と我との中に子を相生めるが故に、吾は汝を忘れ不。毎に来りて相寐よ」という言葉に従って、女がいつも来ては泊まって行くために「来寐」=「岐都彌」となったと説明されている。こうした語呂あわせの趣向は『雄略紀』六年三月の条の小子部連の氏名起源伝承、「蜂と蟻の魚分配」や「米倉小百」等の昔話で面白く語られており、言葉の持つ不思議さに対する興味は印象的であり、それは聴覚によって受け取られるために、聞き手の記憶に強く残り、伝承の際には重要な要素となっている。本縁の「岐都彌」語源説明は恐らく狐が人家近くに来て寝るという民衆の日常生活における自然科学的観察に基づく報告であろうが、それが近代科学の観察と一致するか否かは問題ではなく、ここではその観察結果を語呂あわせの趣向に結び付けているところに民衆的な発想が窺われ、その語呂あわせを引き出すために、狐女房が正体を知られた後も男の許に通って来たとするのは、美濃の「狐の直」の始祖伝承における改変と考えられるのである。

「狐の直」に関しては、残念ながら管見の範囲内の文献ではその実在を証明することができず、仮構という見方もできるが、この話は景戒が作為したものでも、また『霊異記』の編纂された時代に突然発生したものでもなく、かなり以前から美濃地方を中心に語り継がれていたものであることは既に述べた通りであり、それは『霊異記』上巻第三縁や中巻第四縁・第二七縁等尾張国と美濃国を舞台に、美濃の「狐の直」との関連を有する伝承が展開していることからも想像されるから、本縁の原型は恐らく美濃国大野郡に盤踞していた「狐の直」という一族が管理していた伝承であったと考えられる。

では何故美濃地方においてこうした始祖伝承が形成されたのであろうか。これを考察するには、先ず「狐の直」が一体如何

なる階層に属するかを知る必要があるが、『新撰姓氏録』にも「狐の直」を載せておらず、『霊異記』やこれを引用した文献以外に直接この一族について伝えるものがないため断定は難しいが、稲舂女を雇ったり独立した碓屋を単独で所有していることから、農民であるにしても豪農クラスのものであったと推測される。また、女が狐の正体を発見されたのは年米を舂いていた時であったとされているが、『令義解』田令によれば、舂米は正月より八月の間に京へ運ぶように規定されており、狐女房の家で舂米作業をしていたのが二月三月の頃であったこと、しかも「設けし年米」と以前から準備していたものであったことから、事件の起こったのはその年度の供出米の精米作業を行っていた時であったわけで、そうした責任ある仕事に関係していることは、その家が当然豪農に属するものであったことを意味すると考えられる。

更に、直姓であることにも注意する必要がある。岩橋小彌太氏は直について、

古事記には津島の県直、久米直、都祁直、伊勢の船木直、角鹿の済直、近淡海の安直等、日本書紀には凡川内直、倭直、紀直、穴門直、壱伎直等姓のもの甚だ多く、其の殆どが氏の名に地名を負つてゐるので、これも領主的な性格のものである事が知られる。国造、県主に直姓が多い事もこれと考合すべきである。[20]

と述べられている。これから察するに、「狐の直」はその地にあって領主的性格を有していたと推測され、その社会的身分は地方豪族層に近いものであったろう。また、氏の名に地名を負っているものが多いということから、美濃地方に「キツネ」に近い発音をする郷名があったかも知れないが、『霊異記』の説話から知り得る限りでは、「狐の直」は狐という動物に系譜を求めているのであり、それを嫌がった形跡は認められず、むしろそのことを誇りとしているようであるから、狐はその一族の者から霊獣視されていたはずである。但し、美濃の地にあって、狐信仰は「狐の直」を名乗る一族に占有されていたものではなかったであろう。

周知のように、今日でも狐は全国的に稲荷の使いとして信仰を集めている。この両者の関係が時代的に何時頃まで溯り得るかは疑問であるが、五穀を司る神として信仰された稲荷に狐が結び付いたことには、狐に対する民間信仰が媒介となっていると思われる。日本における田の神は、春に山から降りて稲の成熟を見守り、秋収穫が終わると再び山に帰ると信じられているが、餌を求めたり子を育てるために人里に出現する狐の習性は、

ちょうどこの田の神祭の時期と一致するため、農民にとって狐は農業神の示現を意味するとも考えられていたようである。[21] また穀物栽培民の伝承に語られている穀物盗みのモティーフの中に、狐が稲を盗んで人間にもたらしたという形式のものがあることから、[22] 狐は稲と密接な関係を有していたと考えられ、それが一つの契機となって、狐は稲荷信仰と結び付いたと推測される。こうした狐信仰の背景には、田の神信仰とともに、狐が田圃の有害動物を駆除するため、人々はこれを有益動物として保護し、霊獣視するようになったということも考えられるが、自然神崇拝の古代に溯れば、こうした傾向は強かったことであろうし、それは古代人共通の観念であったであろう。『日本昔話集成』の狐女房譚の中にも、福島・埼玉・石川・長野・愛知・広島から報告されている伝承は、狐女房を豊穣をもたらす者として語っており、[23] これも狐の民間信仰の反映と解される。

狐を一族の始祖とすることは、人間を万物の霊長とする現代人には理解し難いことであるが、これを主題とする説話が形成された基盤には右のような狐信仰があったのである。そして、『霊異記』上巻第二縁の舞台となっている美濃国大野郡が木曽三川（木曽・長良・揖斐）による肥沃な土地に恵まれた所であり、現在でもこの地を中心とする地域に班田収授制の基礎となった条里の遺構が見られることから、[24] 古代この地方は農耕を生活基盤とする土地柄であり、そこに在住する殆どの者は生活上の切実な要求から農業神を信仰していたと想像され、それにはやはり狐信仰が主流をなしていたと考えられるが、美濃地方における狐信仰は決して「狐の直」一族に占有されていたものではなく、一般農民にも侵透していたと思われる。従って、ある特定の一族が狐を始祖としたのは、狐と血縁関係を結ぶことにより、一層それとの親近性を増大させ、その関係を通して狐の恩寵を確実化せしめようという生活的次元からの希求は勿論のこと、同じ狐信仰を有する一般農民に対してはその権威の誇示を目的としているのであって、これは「狐の直」の領主的性格に関わっていると考えられる。

更に、異類の聖性を体現した者を始祖とするのは、その一族の有限性を前提としていると同時に、異類がそれを補うものと意識されていることを意味し、一族の聖界への飛翔が試みられていると言えよう。よって、本縁の原型となった美濃の「狐の直」の始祖伝承はその一族内にあっては聖なる伝承であったのである。

## 結語

以上、本縁におけるいくつかの要素を取り出して考察を進めてきたが、話の中核になっているのは「狐の直」の始祖の誕生に関わる一種の恋愛譚で、直接的に仏教の理を説かない話と言えるが、民間布教僧にとってはこうした話も必要であったと考えられる。

当時の民衆はとかく閉鎖的で、古い慣習に縛られ、またそれを支えとして生活していたことであろうから、布教僧が先ずすべきことは、彼等の中に飛び込んで行き、民衆の心理を把握することであった。そういう場合、いくら仏教の布教を目的としているからといっても、経典の難解な言葉や表現を用いては却って人々から拒絶反応が起こらないとも限ない。従って、最初はとにかく民衆が耳を傾けてくれるような説話によって、外者的存在である布教僧に対する警戒心を和らげることが先決で、布教僧にとって民衆の興味・関心を如何にして惹き付けるかは、以後の布教活動を左右する重要なポイントとなるのである。私度僧出身者であり、私度僧としての布教活動の中で自己形成した景戒ならば、未だ固有信仰の中で生活している民衆に布教することの困難さは充分承知していたはずで、単に珍奇な話といっても、それによって人々の心を惹き引けられるならば、それは仏教的意義が説かれていないからといって軽視されるべきではなく、布教の際には充分意味をなすものであると認識していたことであろう。

本縁は豊玉姫説話の系統を引き、在地的な固有信仰を基盤とした説話ではあるが、このように布教時の問題に即して考えてみると、布教僧にとってそれなりに意義のある説話なのであり、『霊異記』に美濃の始祖伝承が収められたのには、こうしたことが一つの理由になっていると理解されるのである。

注 (1) 守屋俊彦「日本霊異記上巻第二縁考」―『国文学攷』第六七号―一頁。

(2) 関敬吾『日本昔話集成』第二部本格昔話1（角川書店）。

(3) 守屋俊彦 前掲論文。

(4) 『太平広記』巻第四五二狐六所収。

(5) 折口信夫「信太妻の話」―中公文庫『折口信夫全集』第二巻（中央公論社）―二八五頁。

(6) 関敬吾 日本歴史新書『昔話の歴史』（至文堂）。

(7) 関敬吾『日本昔話集成』第二部本格昔話1（角川書店）一一六A狐女房・聴耳型、一一六B狐女房・一人女房型。

(8) 『狐媚記』―『群書類従』巻第一三五―「任氏為二人妻一。致二於馬嵬一為二犬彘一殺。惑破鄭生業。」。

(9) 日本古典文学全集『日本霊異記』（小学館）解説四。
(10) 寺川真知夫「説話と昔話・氏族伝承―『霊異記』上巻第二縁の場合―」―『古代文化』第二七巻第八号。
(11) 中国古典文学大系『六朝・唐・宋小説選』（平凡社）、東洋文庫『幽明録・遊仙窟他』（平凡社）。
(12) 『太平広記』巻第四五五狐九所収。
(13) 『太平広記』巻第四五四狐八所収
(14) 『太平広記』巻第四四八狐二所収。
(15) 『太平広記』巻第四五四狐八所収。
(16) 興福寺本では狐女房を追いかける犬について「彼犬将咋家而追吠」と記してあり、中田祝夫氏はこの「彼犬」を母犬と解し、「子犬がほえたてたので、親犬が追っかけた。産後の母犬には猛威がある。」（日本古典文学全集『日本霊異記』上巻第二縁頭註）とされている。だが、国立国会図書館本・群書類従本では「彼犬子」となっており、興福寺本でも女が夫に「此犬打殺」と言っている犬は明らかに子犬を指しているので、狐女房を追いかけたのは、子犬の方であったと解される。
(17) 寺川真知夫　前掲論文。
(18) 長野一雄「美濃狐」（上2）―古代の文学『日本霊異記』（早稲田大学出版部）。
(19) 松前健「豊玉姫神話の信仰的基盤と蛇女房譚」―日本文学研究資料叢書『日本神話II』（有精堂）。
(20) 岩橋小彌太『上代官職制度の研究』（吉川弘文館）二一頁。
(21) 関敬吾　日本歴史新書『昔話の歴史』（至文堂）、『日本社会民俗辞典』（誠文堂新光社）「稲荷信仰」の項参照。
(22) 大林太良『稲作の神話』（弘文堂）。
(23) 関敬吾『日本昔話集成』第二部本格昔話1（角川書店）一一六B狐女房・一人女房型、一一六C狐女房・二人女房型。
(24) 『日本地誌第12巻　愛知県・岐阜県』（二宮書店）。